

京都大学原子炉実験所

小出裕章助教

原発の  
息の根を止めたい!



JR東海労組員ら29名は6月13日、大阪府熊取町にある「京都大学原子炉実験所」を訪れ、小出裕章助教と対談をおこなった。この施設は京都大学が「核エネルギー利用と中性子等の粒子線・放射線の利用に関する研究・教育をおこなう研究所」と謳い1963年に設置された。ウランを燃料にした最大5千kWの熱出力(冷却水も最大50程度)をもつ(発電用ではなく中性子を取り出す)原子炉のほか、それに付随する施設などを保有する。組合員はポケット線量計を渡され、実物の原子炉建屋内の炉や、放射性物質を遠隔操作で扱う「ホットラボラトリ」、廃棄物処理施設などを見学した。



その後、小出助教とは約30分にわたりやりとりをおこなった。小出助教は「たとえ1mSvでも安全な被曝というものはない」とまず前置き。「福島原発での事故や広範囲に及ぶ放射線の影響はとんでもない」「1mSvで1万人中4人、20mSvでは80人の癌の発症する可能性が高まる。子どもは4~5倍も確立が高い。これを当てはめると、80人×4~5倍が癌で死ぬことになる」と怒りを露に。さらに「原発は必ず事故がおきるという覚悟が必要、即刻、廃止すべきだ」と訴えた。その後も「この間、生み出された放射線を出す生成物はなくなる」「今後、燃料となるウランも数十年しか持たない」「人間は一時的な享楽を得ようと電気になっている。それでも電気が欲しいというのか」「原発が出来て45年、ヒロシマ原爆の120万発分の核廃棄物がある。今後、処理研究もしなくてはならない」と続け、「原子力の息の根を何としても止めたい」と力強く語られた。



(写真左上から)

熱意を持って語る小出助教 / 京都大学原子炉実験所の原子炉(中央)。建屋内は厳重に管理されている / ポケット線量計 / 原子炉建屋内にある制御室 / 放射性物質の遠隔操作をおこなう設備 / 研究員が履く靴にも放射線管理区域の印が / 放射性廃棄物処理施設(奥の建屋)と廃棄物用タンク

子どもたちの未来を案ずる小出助教の熱意に答えずにはいられない。「脱原発」へ、さらに闘いを進めよう。